



東北大學

ISSN 2185-5196

# 東北大學埋藏文化財調查室 年次報告2009



芦ノ口遺跡第7次調査  
調査区から八木山方向を望む

**東北大学埋蔵文化財調査室  
年次報告2009**

# 東北大學埋藏文化財調査室 年次報告2009

## 目 次

I. 卷頭言	1
II. 東北大學埋藏文化財調査室の概要	2
1. 東北大學構内の遺跡と埋藏文化財調査	2
2. 埋藏文化財調査室の組織と施設	3
3. 運営委員会・調査部会	6
III. 2009年度（平成21年度）事業の概要	7
1. 埋藏文化財調査の概要	7
(1) 川内北地区の調査	8
(2) 川内南地区の調査	11
(3) 青葉山北地区の調査	13
(4) 富沢地区の調査	15
2. 遺物整理作業	19
3. 保存処理事業	20
4. 資料保管状況	20
5. 研究活動	24
(1) 受託研究・共同研究等	24
(2) 学会発表等	26
(3) 科学研究費採択状況	26
6. 教育普及活動	26
(1) 非常勤講師	26
(2) 授業など教育活動への協力	26
(3) 保管資料の貸出	26
(4) 外部からの派遣依頼等	26
(5) 広報活動	27
《引用・参考文献》	
IV. 資料	
1. 国立大学法人東北大學埋藏文化財調査室規程	28
2. 東北大學埋藏文化財調査室運営委員会委員名簿（2009年度）	30
3. 東北大學埋藏文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2009年度）	30
4. 東北大學埋藏文化財調査室刊行報告書一覧	31

## I. 卷頭言

「東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009」を刊行いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室は、施設整備などに先立つ、構内遺跡の記録保存のための調査と、それに関連する業務を担当する、東北大学の特定事業組織です。埋蔵文化財調査室では、「東北大学埋蔵文化財調査室調査報告」と「東北大学埋蔵文化財調査室年次報告」という、二種類の報告書を刊行しています。

施設整備などに伴う記録保存のための本調査については、その発掘調査報告書を、「東北大学埋蔵文化財調査室調査報告」(以下「調査報告」と略記)というシリーズ名で、各調査ごとに刊行しています。これらの発掘調査報告書については、整理作業に時間を要する場合も多く、調査実施年度から数年後の刊行となることも多くあります。そのため、埋蔵文化財調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のために、「東北大学埋蔵文化財調査室年次報告」(以下「年次報告」と略記)という形で、年度ごとの事業概要を毎年報告しています。

以前は、「東北大学埋蔵文化財調査年報」という形で、発掘調査以外の各種事業を含む当該年度に実施した事業の概要報告と、実施した発掘調査報告の両方を、併せて掲載してきました。2007年度に実施した事業から、事業概要の報告と、発掘調査の報告を分離し、「調査報告」と「年次報告」として刊行しています。

「年次報告」は、調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のため、翌年度の早い時期に刊行する体制にしていく予定です。また、調査室の事業について、より広くご理解いただけるよう、わかり易いものにしていきたいと考えております。

本年次報告では、埋蔵文化財調査室が2009年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、およびその他の調査室が実施した事業について概要をとりまとめて、報告いたします。2009年度は、川内北地区の厚生会館増改築の付帯施設工事に伴う調査に加えて、富沢地区において2ヶ所の調査を実施しました。富沢地区で実施した芦ノ口遺跡第7次調査では、粘土探査坑が多数発見されました。芦ノ口遺跡では、これまでにも複数の時期の粘土探査坑が発見されていました。今回の調査によって、粘土探査坑の分布範囲が大きく広がることが確認されました。詳細な報告は「調査報告3」で行うことになりますが、今後重要な資料となるものと考えております。また、2007年度まで調査を実施していた、地下鉄東西線機能補償関係の調査で出土した遺物の整理作業も、引き続き進めております。

これら事業の実施にあたっては、学内外の関係機関や関係者の多大なご協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、今後もご支援とご協力をお願ひいたします。

埋蔵文化財調査室長 阿子島 香

## II. 東北大学埋蔵文化財調査室の概要

### 1. 東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（表1、図1）。特に川内地区は、ほぼ全城が近世の仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図2）。

現在の日本においては、これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を実施する場合、文化財保護法に基づく届出が義務づけられている。工事の掘削によって遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更によって遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、やむを得ない場合には、発掘調査を行い記録を作成することで、現地保存の次善の策とする記録保存という方法が取られている。記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

一方、構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。同時に、学内に調査組織を設けていると、大学独自のペースで調査を進めることができとなり、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られる。また、地方公共団体の側では、大学が独自に調査することによって負担軽減につながるという側面もある。それぞれの事情が整合する中で、大学内部に独自の埋蔵文化財調査組織が設置されてきた。

表1 東北大学構内の遺跡

所在地名	所在地住所	遺跡名	県道跡番号	時代	備考
川内1	仙台市青葉区 川内27-1-41他	仙台城跡	01033	近世	二の丸地区・二の丸北方武家屋敷地区・御裏林地区
	仙台市青葉区 川内12-2	川内古碑群	01386	鎌倉	弘安10年(1287)・正安4年(1302)他
	仙台市青葉区 川内41	川内B遺跡	01565	繩文・近世	
青葉山1,2	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山B遺跡	01373	繩文・弥生 古代	
	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山E遺跡	01443	繩文・弥生 古代	
青葉山3	仙台市青葉区 荒巻字青葉468-1	青葉山C遺跡	01442	旧石器	
高沢	仙台市太白区 三神峯一丁目101	芦ノ口遺跡	01315	繩文・弥生 古墳・古代	
川渡	大崎市鳴子温泉 大口字蓬田	上川原遺跡	36006	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	丸森遺跡	36038	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	東北大農場2・3号畠遺跡	36098	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町西	町西遺跡	36106	弥生	
小泉浜	牡鹿郡女川町 小泉浜	小泉浜B遺跡	73021	繩文	宿舎裏の山林部分

東北大学においても、同様の理由から、学内に独自の埋蔵文化財調査組織を設け、組織的に対処することとなり、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、その調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いだ。2006年度からは、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へと改組され、センターの事業を引き継いでいる。なお、埋蔵文化財調査委員会の設置から埋蔵文化財調査研究センターにいたる経緯については、「東北大学百年史七」においても、概要が紹介されている。

## 2. 埋蔵文化財調査室の組織と施設

埋蔵文化財調査室の職員は、併任の調査室長1名、文化財調査員3名（うち特任准教授1名、専門職員2名）、事務補佐員1名（時間雇用職員）、および整理作業を担当する作業員（時間雇用職員）からなっている。

・ 2006年度からは、通常業務に加えて、仙台市高速鉄道東西線（以下では地下鉄東西線と呼称）建設による機能補償に伴う発掘調査と、これらに関わる整理・報告書作成作業を、仙台市からの補償費を財源として実施している。通常業務に加えて、これら補償関係事業を実施することが必要となったため、補償費を財源として、2009年度までの任期付きで、文化財調査員1名（一般職員）と技術補佐員1名（准職員）を2007年度当初より増員した。

2008年度末をもって、文化財調査員（専門職員）の高木暢亮が帝京大学へ転出するため退職した。その後任として、2008年度に補償費を財源として採用していた文化財調査員（一般職員）の菅野智則を採用することとなった。そのため補償費を財源とする文化財調査員（一般職員）が欠員となったが、残り任期が1年間であることと、整理作業が順調に進行していたことから、補充は行わなかった。これら補償費を財源とした職員を含む、2009年度の埋蔵文化財調査室の職員は、表2の通りである。

埋蔵文化財調査室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員1名の人工費と、光热水料、自動車維持費、消耗品費などである。

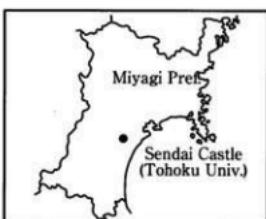
発掘調査については、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。

調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員の賃金も、ここから支弁されている。

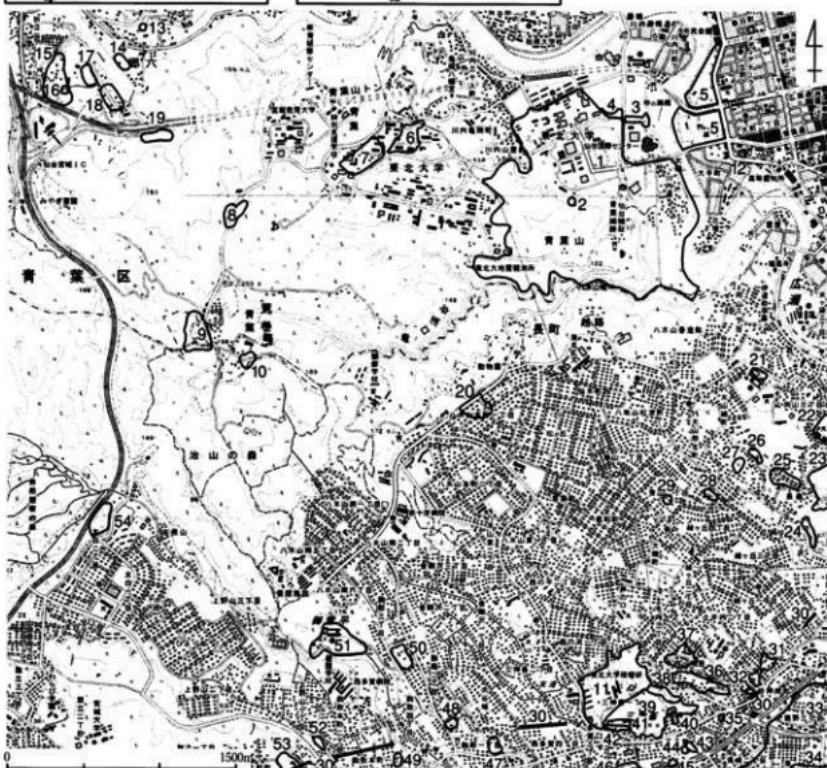
地下鉄東西線機能補償に関わる発掘調査と、整理作業については、仙台市からの補償費を財源としている。上記のように、2007年度から任期付きで増員された文化財調査員1名（一般職員）と技術補佐員1名（准職員）の人工費と、東西線関係の調査に関わる整理作業を担当する作業員の賃金も、補償費を財源としている。

表2 2009年度埋蔵文化財調査室職員

職名		氏名等	備考
文化財調査員	調査室長	文学研究科教授 阿子島香	併任
	特任准教授	藤沢 敦	
	専門職員	柴田恵子	
	専門職員	菅野智則	
	一般職員	久貝	地下鉄東西線機能補償費を財源とした任期付職員
技術補佐員	准職員	百々千鶴	地下鉄東西線機能補償費を財源とした任期付職員
事務補佐員	時間雇用職員	渡辺三夫	埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	7名 (通年3名・短期4名)	全学的基盤経費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	8名 (通年3名・短期5名)	地下鉄東西線機能補償費を財源とした職員



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Kawauchi A Site
- 4 : Kawauchi B Site
- 5 : Sakuragoka kouen Site
- 6 : Aobayama B Site
- 7 : Aobayama E Site
- 8 : Aobayama C Site
- 9 : Aobayama A Site
- 10 : Aobayama D Site
- 11 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 川内A遺跡 4 : 川内B遺跡 5 : 桜ヶ岡公園遺跡 6 : 青葉山B遺跡 7 : 青葉山E遺跡
- 8 : 青葉山C遺跡 9 : 青葉山A遺跡 10 : 青葉山D遺跡 11 : 芦ノ口遺跡 12 : 片平仙台大神宮の板碑 13 : 郷六大日如来の碑
- 14 : 萩岡城跡 15 : 郷六城跡 16 : 郷六筑武碑 17 : 沼田遺跡 18 : 郷六御殿跡 19 : 郷六道路 20 : 松ヶ岡遺跡
- 21 : 向山高裏遺跡 22 : 萩ヶ丘遺跡 23 : 茂ヶ崎城跡 24 : ニツ沢横穴墓群 25 : 萩ヶ岡B遺跡 26 : 八木山緑地町遺跡
- 27 : ニツ沢遺跡 28 : 青山二丁目遺跡 29 : 青山二丁目B遺跡 30 : 杉土手(鹿除土手) 31 : 砂押屋敷遺跡 32 : 砂押古墳
- 33 : 富沢遺跡 34 : 泉崎浦遺跡 35 : 金洗沢古墳 36 : 土手内塗跡 37 : 土手内遺跡 38 : 上手内横穴墓群 39 : 三神峯遺跡
- 40 : 金山窯跡 41 : 三神峯古墳群 42 : 富沢窑跡 43 : 表町東遺跡 44 : 表町古墳 45 : 原東遺跡 46 : 原遺跡 47 : 八幡遺跡
- 48 : 後田遺跡 49 : 町遺跡 50 : 神達山遺跡 51 : 御堂平遺跡 52 : 上野山遺跡 53 : 北前遺跡 54 : 佐保山東遺跡

図1 東北大学と周辺の遺跡

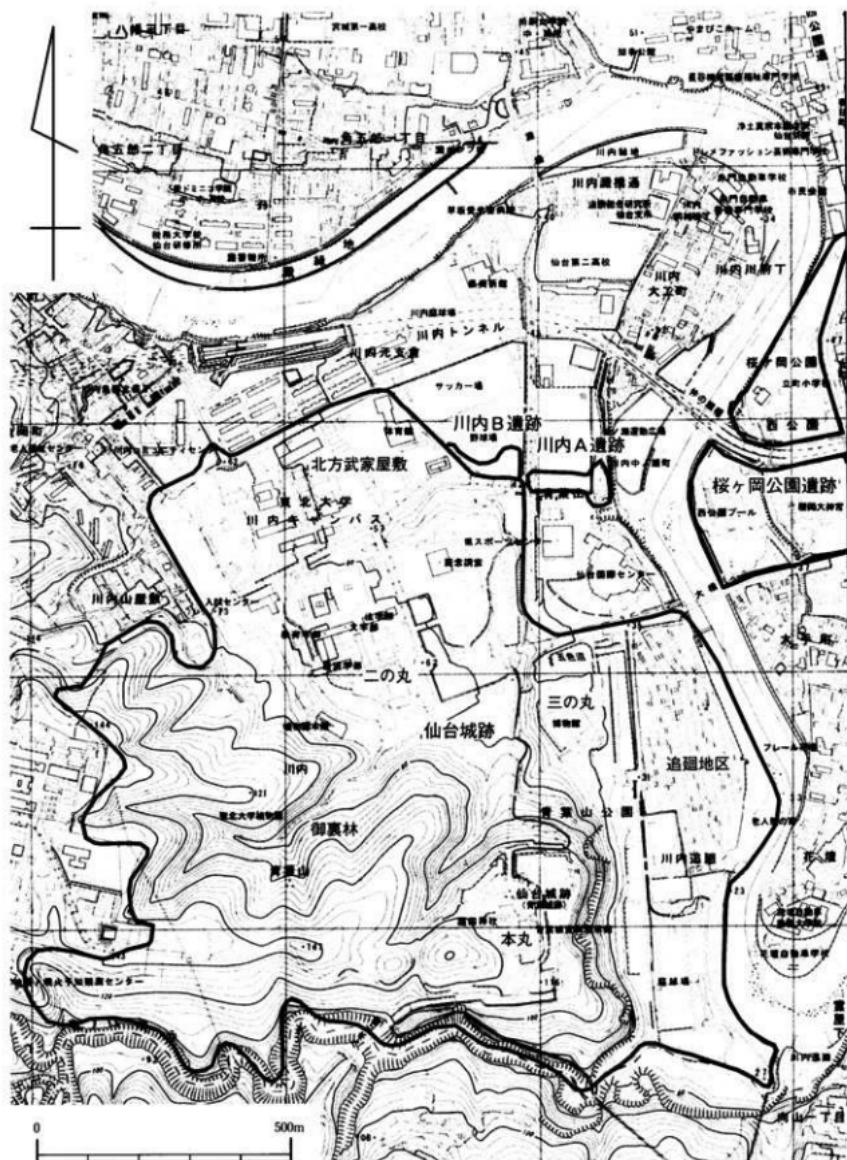


図2 仙台城と二の丸の位置

埋蔵文化財調査室の主要な業務は、調査委員会の設置以降、片平地区の生命科学研究所3階の一画の、合計面積175m<sup>2</sup>を使用して行なってきた。これ以外に、保存処理の作業は、2001年度に生命科学研究所の南側に設置された作業棟（プレハブ平屋建・79m<sup>2</sup>）を利用している。また、ガレージの一部の34m<sup>2</sup>を使用しており、調査室用の公用自動車を保管している他、保存処理用の大型水槽を設置している。2003年度には、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ2階建・202m<sup>2</sup>）が作業棟の南側に設置され、専用の収蔵場所が確保された。

以上の片平構内の施設以外には、川内南地区に、発掘調査用の資材倉庫（プレハブ平屋建・58m<sup>2</sup>）がある。

2008年度に、生命科学研究所の建物の改修工事が実施されることとなり、埋蔵文化財調査室が置かれている区域は、コンクリートの強度の問題などから取り壊されることになった。施設部などが入っている本部別館3の1階で、法科大学院が使用しているスペースがいすれ空く見込みであることから、最終的にはそちらに移転することとし、当面は仮の施設にて業務を行うこととなった。片平構内には適当な空き施設が無いことから、埋蔵文化財調査室が使用している保管倉庫の1階を改修して使用することとした。保管倉庫1階に収蔵していた、瓦や木製品（乾燥状態で保管）については、片平地区の旧多元物質研究所反応化学研究棟4号館3階の空き教室（2部屋・186m<sup>2</sup>）を確保し、そちらへ移動した。保管倉庫1階の面積は101m<sup>2</sup>のため、生命科学研究所3階で使用していた175m<sup>2</sup>からは、大きく減少した。そのため、使用頻度の少ない文献や資料などは、旧反応研4号館へ移動した。2段階に渡る引越作業を、2008年8月に終え、仮施設での業務を開始した。2009年度は、この仮施設で、業務を継続して実施している。

### 3. 運営委員会・調査部会

東北大理埋蔵文化財調査室では、運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されており、委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2009年度（平成21年度）は、運営委員会は1回開催した。例年開催している年度当初の運営委員会を、6月に開催している。なお、今年度は、調査部会は開催されなかった。運営委員会の開催日月と議事内容は、以下の通りである。

#### 埋蔵文化財調査室運営委員会

- 6月16日 審議事項 (1) 平成21年度埋蔵文化財調査計画について  
(2) 平成21年度調査室運営費について  
(3) 平成21年度の整理作業計画について  
(4) 専門分野の委員の交代について
- 報告事項 (1) 文化財調査員の交代について  
(2) 平成20年度埋蔵文化財調査結果について  
(3) 平成20年度調査室運営費決算について  
(4) 平成20年度の整理作業について  
(5) その他

### III. 2009年度（平成21年度）事業の概要

#### 1. 埋蔵文化財調査の概要

2009年度は、本調査3件、立会調査16件を実施した（表3）。

立会調査は、これまで仙台市教育委員会と合同で実施していたが、2009年度途中から、東北大学埋蔵文化財調査室が実施する形となった。周知の埋蔵文化財包蔵地での土木工事等のための発掘届出に対して、仙台市教育委員会より出される工事立会を通知する文書において、「立会については、事前に工事日程を提出の上、東北大学埋蔵文化財調査室が行い、工事終了後の写真提出をもって、その実施に代える」旨の指示がなされることとなった。これ以降、通知の指示に沿って、工事日程を事前に提出した上で、当調査室が工事実施時の立会調査を行うこととなった。

また2009年度には、青葉山北キャンパスに所在する周知の遺跡の隣接地において、学内措置として立会調査を3件実施している。

表3 2009年度調査概要表

調査の種類	地区	調査地点(略号)	原因	調査期間	面積(㎡)	時期
本調査	川内北	厚生会館周辺(BK13)	厚生会館増改築工事(付帯工事部分)	6/15~9/11・18, 10/1, 11/5, 12/10, 2/3・4	44.9	近世
	富沢	核理研本館北側(TM7)	核理研光源加速器棟新設工事	8/3~9/30	330.3	繩文・古墳
	富沢	富沢団地特高変電所(TM8)	特高変電所受電設備改修その他工事	9/24~10/23, 11/24・26, 12/1・2・7・8・10・18, 2/16~18	90.2	繩文
立会調査	川内南	植物園本館前庭(2009-1)	植物園内勾配建立工事	8/4	-	
	川内北	講義棟周辺(2009-2)	講義棟改修工事	9/11・17	-	
	川内北	千賀沢北側(2009-3)	バス停留所南側駐輪場拡幅工事	9/15	-	
	川内北	テニスコート北半部(2009-4)	テニスコート改修工事	10/5, 1/8	-	
	川内北	体育館西側(2009-5)	駐輪場舗装整備工事	10/15	-	
	富沢	光源加速器棟北側(2009-6)	原子核理学研究施設設置取扱工事	11/19	-	
	川内南	法学院周辺(2009-7)	総合研究棟(法医学系)改修工事	11/25	-	
	川内南	川内南キャンパス内各所(2009-8)	給水設備監視装置改修工事	12/14~16	-	
	青葉山	サイクロトロン実験棟東側(2009-9)	サイクロトロン実験棟改修工事	10/28, 12/24, 1/7・8	-	
	川内北・川内南	川内北・南キャンパス内各所(2009-10)	屋外変電設備改修工事	1/26, 2/2・4・8	-	
	川内南	植物園内部(2009-11)	植物園園路その他整備工事	2/1・22~26, 3/1~4・12	-	
	川内北	講義棟周辺(2009-12)	環境整備(舗装等)工事	3/1	-	
	富沢	R1実験等南側周辺(2009-13)	特高変電所受電施設改修その他工事(車道整備)	3/11・17・18	-	
	青葉山	理学部管理棟東側(2009-14)	構内道路ロードヒーティング施設工事	3/15	-	
立会調査 (学内措置)	川内北	厚生会館南側(2009-15)	植栽工事	3/15	-	
	川内南	経済学部研究棟前庭(2009-16)	通路舗装改修工事	3/31	-	
	青葉山	ニュートリノ科学研究センター周辺(2009-①)	ニュートリノ科学研究センター改修工事	2/15・16・18	-	
立会調査 (学内措置)	青葉山	物理研究棟南西側(2009-②)	理学研究科物理研究棟改修その他工事	1/28	-	
	青葉山	サイクロトロン実験棟北側(2009-③)	基幹・環境整備(通路・排水・共同溝等)工事 汚水排水管水圧送管理設	3/17・19	-	

### (1) 川内北地区の調査

川内北地区では、本調査1件、立会調査7件を実施した(図3)。

本調査を実施した1件の概要は、以下の通りである。

#### ・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点(BK13・厚生会館増改築工事に伴う調査付帯施設部分)

川内北地区のほぼ中央南よりに、川内北地区厚生会館が置かれている。この厚生会館の増改築工事が、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されることとなった。工事に先立って、2008年度に、増築建物本体部分の調査を実施した。増改築工事に関わる、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事については、工事が実施される2009年度に調査を行うこととした。

付帯設備の工事では、地下の遺構を破壊しないために、できるだけ掘削深さが浅くなるよう、施設部担当者に依頼して、設計の際に配慮していただいた。そのためほとんどの工事は、江戸時代の地層に影響を与えない、新しい盛土の範囲におさまる深さとなった。しかし、汚水・雨水排水管の一部については、江戸時代の遺構確認面まで、工事による掘削が達することが予想された。そのため、工事による掘削に調査室担当者が立会調査を行い、必要な部分は工事を中断し、本調査を実施する体制を組んだ。

増築建物の西側の3ヶ所、東側の5ヶ所で、本調査を実施した(図4)。本調査を実施した面積は、44.9m<sup>2</sup>であった。これ以外の部分については、工事による掘削が江戸時代の地層に及ばないことが確認されたため、立会調査で調査を終えている。本調査は、6月15日からの8月5日までの期間に、断続的に実施した。それ以降は、立会調査のみである。

本調査を実施した8箇所の調査区では、いずれも地山面が遺構確認面であった。西1区では、部分的に遺構が確認されたため、精査を行った。工事による掘削が、遺構確認面より上で止まることから、平面プランの確認にとどめた。西2区・3区では、2008年度に実施した本体西区で検出された、8号遺構と9号遺構の続きと考えられる遺構を確認した。ほとんどは、工事掘削が遺構確認面まで及ばないため、遺構プランの確認でとどめたが、樹設置で深く掘削される一部については、遺構埋土を掘り上げている。東1区では、地山面まで掘削が至り、落ち込みプランが確認されたため、掘り上げて調査したが、近代以降の落ち込みであることが判明した。東2区では、小規模なピットが2基検出された。東3区では、地山面が確認されたが、遺構は確認されなかった。東4区・5区では、狭い面積の割には遺構が多く、小規模な溝状遺構5条とピット6基を検出した。遺物は、江戸時代の陶磁器類や瓦などが、2箱出土した。

この川内北地区厚生会館増改築に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査については、2008年度の増築建物本体部分の調査と、2009年度の付帯施設部分の調査をあわせて、「東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告2」として、別に調査報告書を刊行する予定である。

立会調査を実施した7件の概要は、以下の通りである。その内1件は、川内北地区と川内南地区の両方にまたがるものであるが、ここに含めて記載する。

#### ・講義棟改修工事(2009-2)

川内北地区の中央には講義棟が3棟並んでいるが、これら講義棟の耐震補強を含む全面改修工事である。ほとんどの工事は掘削を伴わないものであったが、スロープ基礎、電気・ガス・給排水の配管工事において、掘削工事が行われた。掘削工事の多くは、以前に掘削工事が行われた範囲内であった。新たに掘削される部分も、掘削工事は新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかった。

#### ・バス停留所南側駐輪場拡幅工事(2009-3)

川内キャンパスを南北に分ける千賀沢の北側を走る道路には、東北大大学川内キャンパス・萩ホール前のバス停留所が設けられている。このバス停留所の南側の、千賀沢との間にある駐輪場を、拡幅する工事である。駐輪場は、碎石を盛って造成されるため掘削工事は行われないが、フェンスの支柱の基礎については、掘削されること

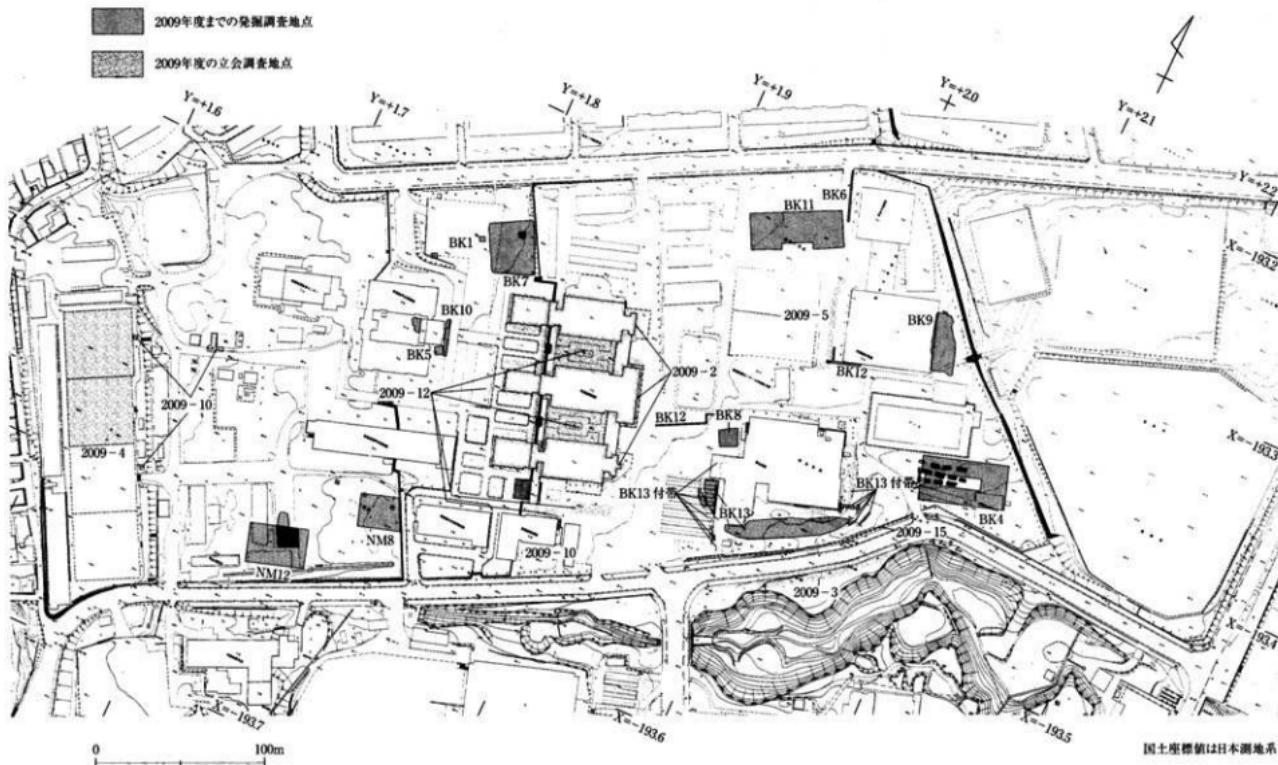


図3 川内北地区調査地点

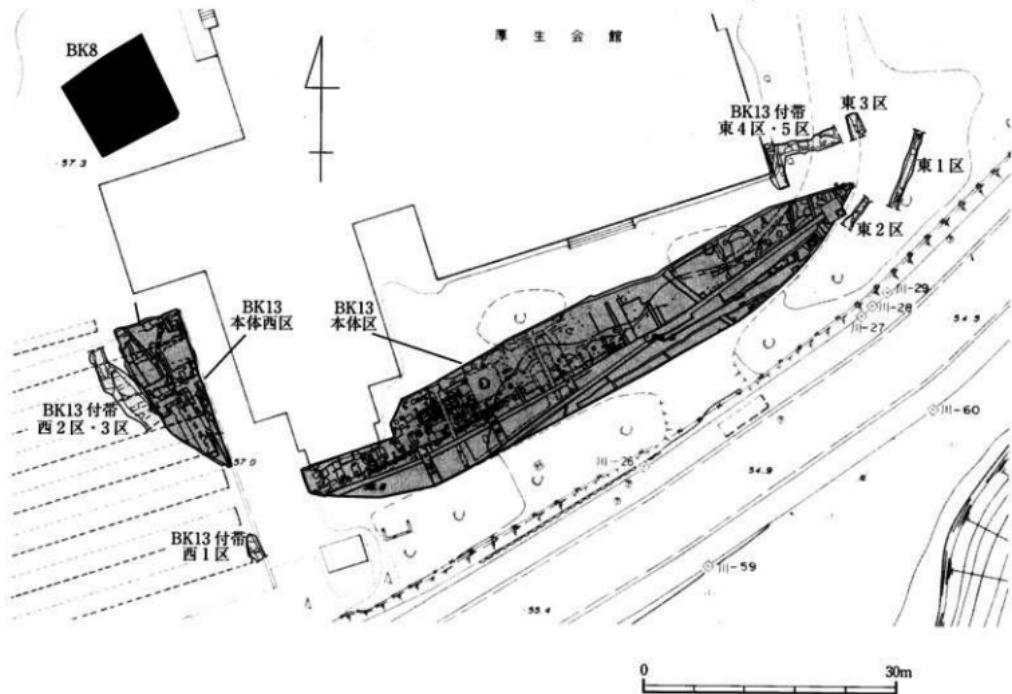


図4 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点調査区の位置

となつた。盛土の上に支柱が設けられるため、もともとの地面を掘る深さは、5~21cmと浅いものであったため、問題はなかつた。

・テニスコート改修工事（2009-4）

川内北地区の西端には、テニスコートが8面設けられているが、その北側4面を改修する工事である。2008年度に、南側半分の改修工事が実施されており、それに引き続き北側の工事が行われた。コート部分は現在の舗装と碎石層を除去し、コート造成以前の地表を最大で20cmほど削平するものであった。これと別に、側溝やネット支柱基礎部分については、深く掘削工事が行われる場所もあった。一部で明治時代以降の切石や年板岩などが露出したが、江戸時代に遡る地層には達せず、問題はなかつた。

・体育館西側駐輪場舗装整備工事（2009-5）

体育館西側の、ハンドボールコートの間に、駐輪場を整備する工事である。現在の碎石層を10cmほど削削し、舗装を行うものである。側溝設置部分も、深さ20cmほどの削削であった。いずれも浅いため、新しい盛土の範囲におさまり、問題はなかつた。

・川内北地区川内南地区屋外変電設備等改修工事（2009-10）

工事範囲は川内北地区と川内南地区にまたがるが、便宜的にここに含めて報告する。工事場所は、北地区が4箇所、南地区が1箇所であった。工事内容は、コンクリート電柱設置、支線アンカー埋設、アース板埋設である。北地区テニスコート脇の、北側の工事削削場所の一部で、江戸時代の遺構の可能性のある地層が確認されたため、削削深さを、計画より50cm浅くする措置をとった。これ以外の場所では、いずれも新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかつた。

・講義棟周辺環境整備工事（2009-12）

川内北地区の中央には講義棟が3棟並んでいるが、上記のように耐震補強を含む全面改修工事が2009年度に実施された。その上で、周辺の環境整備を別工事で行うこととなった。工事内容は、既存の設備や舗装を撤去し、舗装、緑地整備、植栽、ベンチ設置、外灯設置などが行われるものであった。講義棟は、段差をはさんで建てられているが、これまでの調査によって、この段差は近代以降に造られたものであることが明らかとなっている。そのため段差の下側では削平が大きくなされており、段差の上側では盛土が厚いことが想定された。また、段差の下側の、講義棟にはさまれた中庭部分は、全体にかさ上げする形で、工事が行われることとなった。調査の結果、いずれの工事場所においても、以前の工事による埋戻し土や新しい盛土で、遺構・遺物は発見されなかつた。

・厚生会館南側植栽工事（2009-15）

厚生会館南側の市道との境界付近は、傾斜面となっており、その傾斜の上端にネットフェンスが設置されている。このフェンスの基礎は、市道側に大きく傾いており危険なため、ネットフェンスを撤去し、代わりにドウダンツツジを植栽する工事である。削削深さは、10~25cmと浅いため、いずれも新しい盛土の範囲内でおさまり、問題はなかつた。

## （2）川内南地区的調査

川内南地区では、立会調査5件を実施した（図5）。

・植物園本館前庭句碑建立工事（2009-1）

植物園本館の東側に広がる前庭の一画の芝地部分に、句碑を建立する工事である。「きたごち俳句会」同人会から、東北大学に対して句碑の寄付採納の申し出がなされ、同会によって建立されることとなったものである。削削範囲が狭く、深さも浅いため立会調査とした。10~15cmほどの厚さの表土の下は、すぐに地山の砂礫層が露出した。かなり削平を受けていると考えられ、問題はなかつた。

・総合研究棟（法学系）改修工事（2009-7）

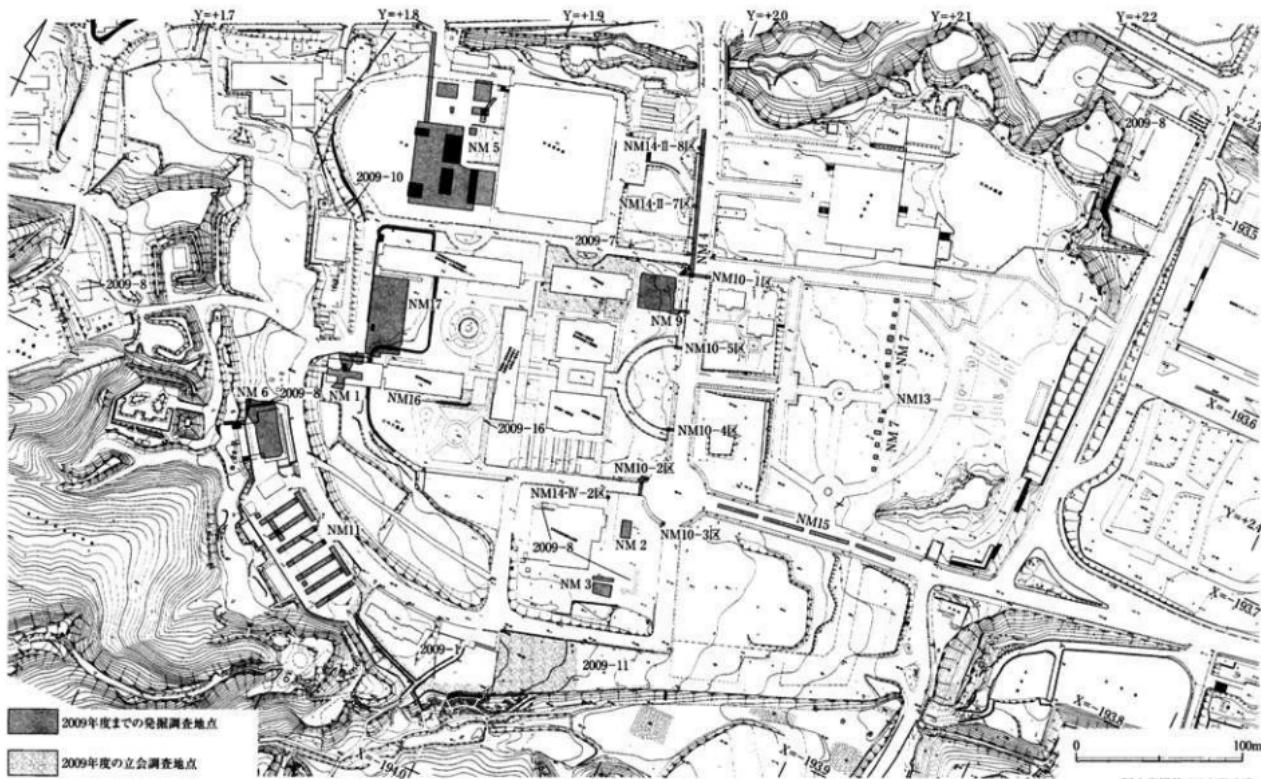


図5 川内南地区調査地点

法学部棟の耐震補強を含む改修工事で、掘削を伴う工事は、建物北側玄関ポーチ周辺と南側の通路の一部で行われた。舗装改修・境界ブロック改修・植栽工事部分では、最大でも深さ30cm程度の掘削のため、新しい盛土の範囲におさまった。給水管設置部分は深さ50cmほどと、若干深く掘削されたが、既存排水管で掘削された範囲に埋設したため、問題はなかった。

・給水設備監視装置改修工事（2009-8）

川内南地区の、ポンプ室周辺・植物園記念館・厚生会館周辺において、給水管自動制御配管線の増設などを行う工事である。いずれの場所も、以前に掘削工事が行われている箇所である。今回の工事による掘削深さは30～50cm程度であったため、以前の工事掘削範囲におさまり問題はなかった。

・植物園園路その他整備工事（2009-11）

植物園前庭とその東側で行われた、屋外整備工事である。植物園本館東側の前庭では、園路舗装と道標杭などの設置工事が行われた。前庭のさらに東側では、新たに園庭を拡張し芝貼り・植栽・花壇設置・園路舗装・フェンスや作業門扉などの設置工事が行われた。工事のはほとんどは、掘削深さがごく浅いため問題はなかった。しかし、掘削が深くなる門扉の基礎については、北側の支柱基礎において、現地表から60cmほどのところで地山面が露出し、造構らしきプランが確認された。そのため、仙台市教育委員会文化財課担当者に現地での確認を求め、関係者で協議した結果、門扉の位置を東に2mほどずらし、盛土を行うことで、造構面への影響がないようにする措置をとった。

・経済学部研究棟前庭通路舗装改修工事（2009-16）

経済学部研究棟の東側前庭を通る通路の、舗装改修工事である。既存通路の老朽化した舗装を除去し、新しく舗装を行うものである。掘削は表層のアスファルトにとどまり、問題はなかった。

### （3）青葉山北地区の調査

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、立会調査2件を実施した。その他に、周知の遺跡の隣接地において、学内措置として立会調査を3件実施している（図6）。

立会調査を実施した2件の概要は、以下の通りである。

・サイクロトロン実験棟改修工事（2009-9）

青葉山北キャンパスの理学研究科の西側に、サイクロトロンRⅠセンターが所在する。このサイクロトロン実験棟改修工事に伴い、実験棟東側の正面玄関周辺において、舗装などの改修工事が行われた。掘削を伴う工事は、舗装改修・隅溝改修・集水樹改修であった。いずれも、盛土の範囲におさまり、問題はなかった。

・理学部管理棟東側構内道路ロードヒーティング設施工事（2009-14）

理学部管理棟東側の、市道から構内に入る道路の車道と歩道部分に、凍結防止用のロードヒーティングを設置する工事である。既存道路の舗装を撤去するだけであったため、掘削は、舗装下の碎石層の上部で終了し、問題はなかった。

青葉山B遺跡と青葉山E遺跡の隣接地で実施された工事については、文化財保護法上の届出義務はないが、学内措置として、工事実施時に埋蔵文化財調査室が立会調査を実施した。

・ニュートリノ科学研究センター改修工事（2009-①）

青葉山B遺跡の南東側に隣接する場所で、ニュートリノ科学研究センターを建て替える工事である。周知の遺跡の隣接地であるため、立会調査を実施した。工事対象区域は、本来の地形から、既に一段切り下げられた場所である。そのため、後期旧石器時代以降の地層は残されておらず、問題はなかった。

・理学研究科物理研究棟改修その他工事（2009-②）

理学研究科の物理研究棟南側に、自転車置き場を設置し、上屋を造るための基礎掘削工事である。青葉山E遺

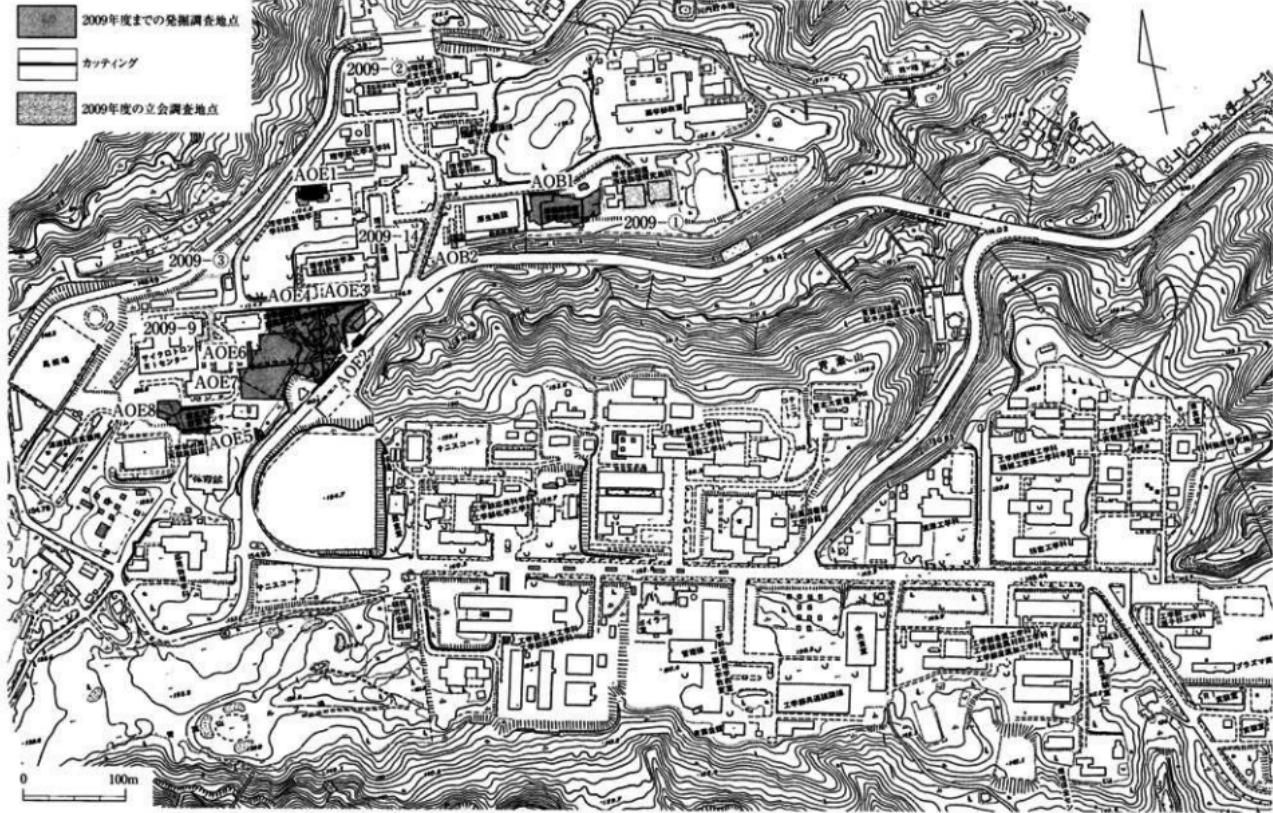


図6 青葉山地区調査地点

跡の北側、青葉山B遺跡の西側にあたるため、立会調査を実施した。掘削箇所の全てが、既存建物建設や共同溝設置の際に掘削された埋戻し土で、問題はなかった。

#### ・サイクロトロン実験棟北側污水排水管水圧送管理設工事（2009-③）

造成が進められている新キャンパスの、基幹・環境整備工事の一環として、新キャンパスから伸びる污水排水管水圧送管が、青葉山北地区の北西側の端を通過することになった。サイクロトロン実験棟北側では、青葉山E遺跡の隣接地を通ることから、この区域について立会調査を実施した。現在の平坦地の端にあたり、全て新たに造成された場所であったため、掘削は新しい盛土の範囲におさまり、問題はなかった。なお2009年度に実施したのは一部にとどまり、翌2010年度にも工事が継続して実施されることになった。

#### （4）富沢地区的調査

理学研究科付属原子核理学研究施設（2009年12月から電子光理学研究センター）や職員宿舎が所在する富沢地区（仙台市太白区三神峯一丁目）では、本調査2件、立会調査2件を実施した（図7）。富沢地区では、ほぼ全域が芦ノ口遺跡の範囲内となっている。

#### ・芦ノ口遺跡第7次調査（TM7・電子光理学研究センター光源加速器棟新営に伴う調査）

既存建物を撤去し、新たに光源加速器棟を建設する工事に伴う調査である。既存建物は布基礎構造のため、基礎の間では遺構が残存している可能性が高いと考えられたことから、建設される建物本体部分と、そこから北側に伸びる排水管部分の、工事で掘削される範囲の全面を調査することとした。調査面積は、330.3m<sup>2</sup>であった。

既存建物などの基礎で破壊されている部分も多いが、ピット83基を検出した（図8）。平面形状が不整形なものが多く、壁面がオーバーハングするものや、底面の凹凸が著しいものが多い。芦ノ口遺跡では、今回の調査区の東側にあたる第4～6次調査において、粘土探掘坑群が検出されている（年報14・19-1・21）。今回検出された遺構も、形状や堆積状況が類似することから、粘土探掘坑の可能性が高いと考えられる。これらの遺構は、調査区の北部に集中し、特に北東部では、やや大型の遺構が多く検出されている。出土遺物は少ないと見え、保存状態も良くない。芦ノ口遺跡の粘土探掘坑から出土した遺物全体に共通するが、土器の保存状態はおしなべて悪く、表面が剥落したものがほとんどを占め、詳細な特徴が判明しないものが多い。今回の出土遺物も同様であるが、古墳時代中期の土師器や、保存状態が悪いため判然としない部分も多いが、形態からは縄文土器の深鉢の可能性が考えられる土器などが出土している。

#### ・芦ノ口遺跡第8次調査（TM8・電子光理学研究センター特高変電所受変電設備改修その他工事に伴う調査）

富沢地区的南西側に置かれている、特高変電所の受変電設備改修に伴う調査である。富沢地区の南側は三神峯丘陵に接し、丘陵斜面の裾にあたる場所である。増設される受変電設備の基礎で、深く掘削される区域に合わせて、1～3区の3箇所に調査区を設定した（図9）。フェンスの基礎やケーブル埋設など、掘削が深い部分については、立会調査で対応することとした。発掘調査を実施した面積は、90.2m<sup>2</sup>で、9月24日から10月23日の一ヶ月間実施した。これ以降は、立会調査のみである。

既存施設建設に伴う盛土（1層）を重機で除去し、盛土以前の旧表土と考えられる黒色土層（2層）を、ほぼ全面で検出した。この黒色土以下の地層は、南西から北東方向に向かって傾斜している。縄文土器小片を、わずかに含んでいる。丘陵側の1区では、この黒色土層は検出されず、下位の3層以下の層序を確認した。丘陵側の高い部分が、既存施設建設時の整地の際に削平された結果と考えられる。また、2区の北端から3区にかけて、盛土以前の沢状の落ち込みを検出している。

3層は、大きめの礫を含むしまりの弱い褐色土層である。非常に摩滅した土器小片と石器を少数含んでいる。南部では厚く堆積しているが、北側に進むにつれ、礫と遺物は大きく減少する。このような状況から、3層は三神峯丘陵方面からの崩壊土層と考えられる。4層は、礫が少なく固くしまった粘土層で、遺物は4層上面でごく

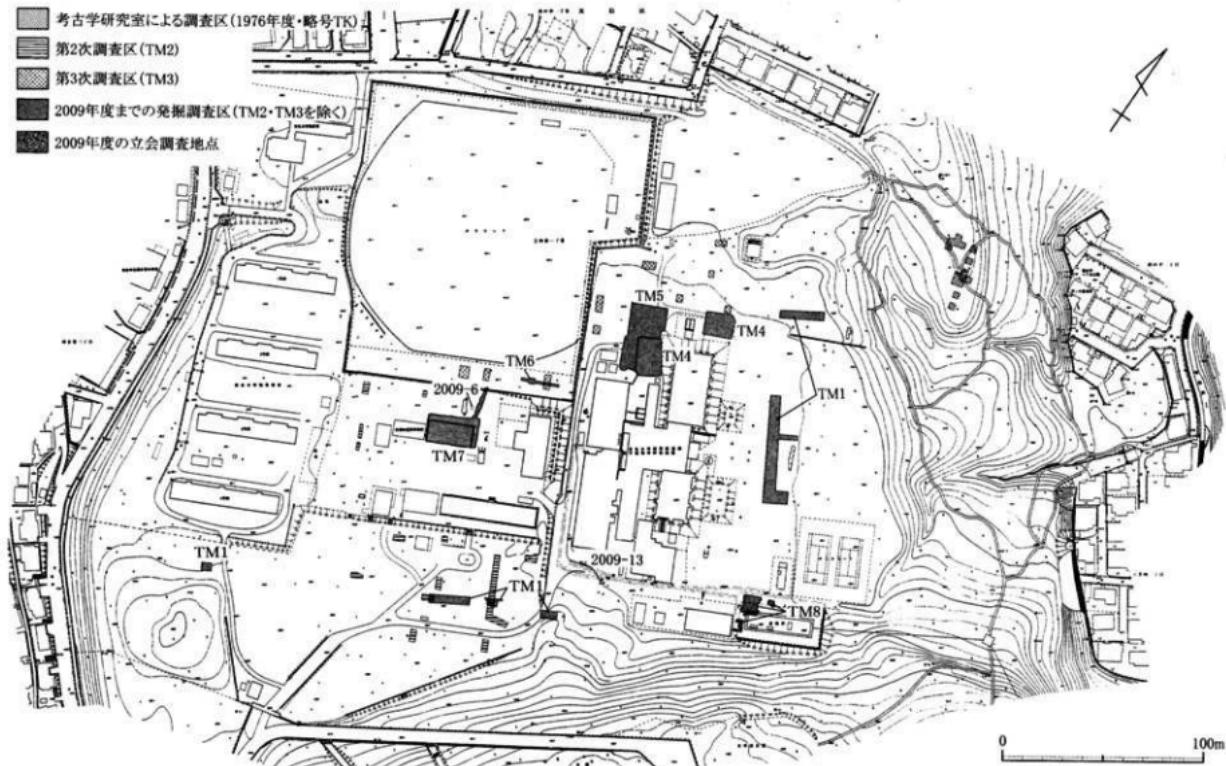


図7 富沢地区調査地点

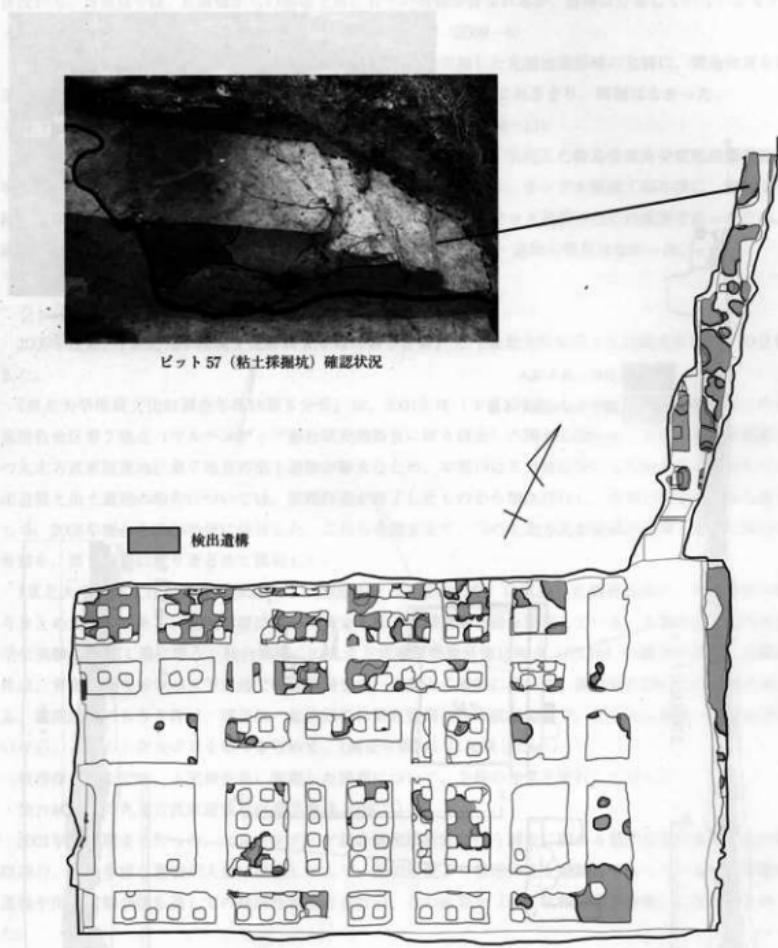
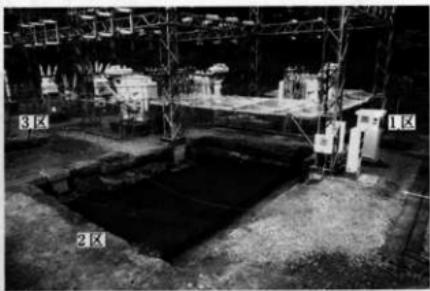


図8 富沢芦ノ口遺跡第7次調査検出遺構配置図



調査区全景(北西より)

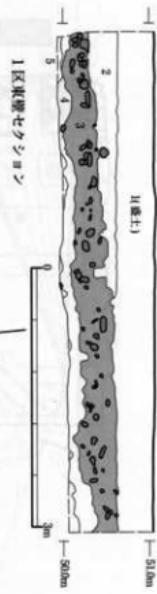


図9 富沢芦ノ口遺跡第8次調査調査状況

少數認められた。5層は、かなり固くしまった小円礫混じりの砂質土層で、遺物は全く含まれない。このような状況から、当地点では、丘陵側からの崩壊土層に若干の遺物が含まれるが、遺構は分布していないと考えられる。

・電子光物理学研究センター光源加速器棟北側物置取設工事（2009-6）

上記のように、建設に先立って芦ノ口遺跡第7次調査を実施した光源加速器棟の北側に、別途物置を設置する工事である。掘削は、深さ20cm程度であったため、現在の表土中におさまり、問題はなかった。

・電子光物理学研究センターR I 実験棟南側周辺車道整備工事（2009-13）

特高変電所からR I 実験棟南側を通る、通路の舗装工事である。上記した特高変電所受変電設備改修その他工事の際に、電気ケーブル埋設工事が実施された場所と重なっている。ケーブル埋設工事の後に、別の工事として舗装工事が実施されることとなった。アスファルト舗装と境界ブロック設置のための掘削であったため、深さは最大で36cmであった。電気ケーブル埋設工事の際と同様に、遺構・遺物の発見はなかった。

## 2. 遺物整理作業

2009年度は、「東北大埋蔵文化財調査年報19第5分冊」と「東北大埋蔵文化財調査年報24」の2冊を刊行した。

「東北大埋蔵文化財調査年報19第5分冊」は、2001年度（平成13年度）に実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（マルチメディア総合研究棟新宮に伴う調査）の調査に関わる、分析・考察を掲載した。二の丸北方武家屋敷地区第7地点の出土遺物が膨大なため、年報19は5分冊に分けて刊行することとしている。検出遺構と出土遺物の報告については、整理作業が終了したものから順次刊行し、年報19第1分冊から第4分冊として、2005年度から2008年度に刊行した。これらを踏まえて、二の丸北方武家屋敷地区第7地点に関わる分析・考察を、第5分冊に取りまとめて掲載した。

「東北大埋蔵文化財調査年報24」は、2006年度（平成18年度）に実施した調査成果や、年度事業の概要をとりまとめたものである。2006年度には、本調査1件と試掘調査2件を実施している。本調査は、川内北地区での学生実験棟改修工事に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査である。試掘調査の1件は、青葉山新キャンパス予定地での試掘調査で、青葉山C遺跡において、後期旧石器時代の石器が出土している。試掘調査のもう1件は、理学部・薬学部松林園路整備に伴う試掘調査で、こちらは遺構・遺物は発見されていない。これらの調査成果を取りまとめて、「調査年報24」に掲載した。

整理作業としては、上記報告書に掲載した調査について、2件の作業を併行して行った。

・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）

2001年度に調査を行った、マルチメディア総合研究棟新宮に伴う調査に関わる整理作業である。江戸時代の各時期の、多種多様な遺物が大量に出土しており、2002年度より整理作業を継続して行っている。当年度は、検出遺構や出土遺物全体を通しての検討作業などを行い、その結果を「調査年報19第5分冊」にとりまとめて掲載した。

・2006年度（平成18年度）実施調査

2006年度に実施した、1件の本調査と、2件の試掘調査に関わる整理作業である。いずれも遺物の量は多くなかったので、合わせて整理作業を行った。本調査の1件は、川内北地区学生実験棟改修工事に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査である。試掘調査の1件は、青葉山新キャンパス予定地の試掘調査で、青葉山C遺跡において、後期旧石器時代の石器が出土している。試掘調査のもう1件は、理学部・薬学部松林園路整備に伴う試掘調査であるが、こちらでは遺構・遺物の発見はなかった。これら3件の調査について、調査図面・写真的整理と、出土遺物の整理と資料化などの作業を実施した。その成果については、「調査年報24」にとりまとめて掲載した。

これら通常の整理作業業務とは別に、地下鉄東西線補償関係の調査に関わる整理作業も継続している。川内サブアリーナ棟新營に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）の調査と、屋外給排水管設備などの工事に伴う武家屋敷地区第12地点（BK12）の調査である。仙台市からの補償経費を財源として、2007年度から2009年度の3ヶ年に渡って整理作業を行う予定で、2009年度はその最終年度にある。遺構の検討や遺構図面の作成・トレース、遺物の実測・トレース・写真撮影や、遺物観察表の作成、図版のレイアウトなどの作業を行った。報告書に掲載する図版類などの作成は終了し、本文執筆の一部と、幅集作業などを残すだけとなった。残る作業は文化財調査員が担当するため、整理作業員が担当する整理作業としては、2009年度で終了することとなった。報告書は、これらの作業が終わる、翌年度以降に刊行することとした。

### 3. 保存処理事業

東北大大学埋蔵文化財調査室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（年報16）。

2008年度は、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（2001年度調査・BK7）の出土木製品の処理を継続して実施した。武家屋敷地区第7地点から出土した木製品は、木簡を含め膨大な数量にのぼる。保存処理は2006年度から開始したが、4～5ヶ年間が必要となる見込みである。2009年度は、前年度に引き続き、下駄、曲物、桶などの木製品の処理を行った。

2007年度に調査した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）でも、処理の必要な有機質遺物が出土している。その中で、杭、木桶など、大型の遺物の処理を実施した。これらの一一部は、前年度から処理を行っており、継続して作業している。また、同地点から出土した銅製品のクリーニング作業を実施している。

### 4. 資料保管状況

東北大大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには含まれていない。東北大大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表4と図10である。

2009年度末時点で、当調査室で保管している遺物総量は2811箱である。前年度と比較すると、7箱の増加となっている。

2009年度の調査によって新たに増加した箱数は、5箱である。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）付帯工事部分の調査によるものが2箱である。富沢芦ノ口遺跡第7次調査（TM7）によるものが2箱、富沢芦ノ口遺跡第8次調査（TM8）によるものが1箱である。

2009年度は、「調査年報19第5分冊」と「調査年報24」を刊行した。

「調査年報19第5分冊」では、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の調査に関わる分析・考察を掲載した。そのため、遺物箱数の増減はない。

「調査年報24」では、2006年度に実施した、青葉山C遺跡の調査と、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）の調査成果を報告した。青葉山C遺跡の出土遺物は、整理作業前で1箱、整理作業後も1箱である。武家屋敷地区第10地点の出土遺物は、整理作業前は2箱であったが、接合などで体積が増加したため、整理作業後は4箱となった。

表4 年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

年 度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備 考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1 (1983年度調査分) 刊行
1985	113	108	221	年報2 (1984年度調査分) 刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1028	
1989	811	221	1,032	年報3 (1985年度調査分) 刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5 (1986・87年度調査分) 刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6 (1988年度調査分) 刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7 (1989年度調査分) 刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8 (1990年度調査分) 刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10 (1991・92年度調査分) 刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12 (1993・94年度調査分) 刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13 (1995年度調査分) 刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16 (1996・97・98年度調査分) 刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17 (1999年度調査分) 刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18 (2000年度調査分) 刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19・1・20 (2001・02年度調査分) 刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19・3・21 (2001・03年度調査分) 刊行
2007	281	2,507	2,788	年報19・4・22 (2001・04年度調査分) 刊行
2008	185	2,619	2,804	年報19・2・23 (2001・05年度調査分) 刊行
2009	21	2,790	2,811	地下鉄捕獲関係調査整理作業終了

箱数

3500

■未整理  
□整理済

3000

2500

2000

1500

1000

0

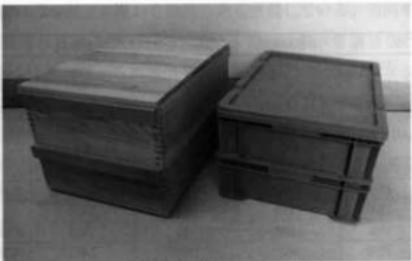
1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009

年度

図10 収蔵遺物量の推移



1. 遺物収蔵用の木製箱と蓋



2. 木製箱と油脂製コンテナの比較

図11 遺物収蔵用の木製箱



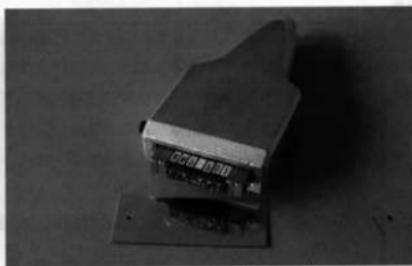
1. 木製遺物収蔵箱の箱番号・内容表示の方法



2. 真鍮製箱番号刻印プレートの貼付状況



3. 刻印セット



4. 真鍮プレートへの箱番号の刻印

図12 木製遺物収蔵箱の表示方法

2009年度には、地下鉄東西線補償関係の調査に関わる整理作業が終了した。調査報告書の刊行は翌年度以降となったが、遺物整理作業は終了したため、遺物の収蔵体制も整理後の形へ移行した。整理作業前の箱数166箱で、整理作業後も変わらず166箱となった。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（B K11）の出土遺物が165箱、武家屋敷地区第12地点（B K12）の出土遺物が1箱である。

これらを合わせると、未整理箱数は、整理作業終了による減少が169箱、新たに調査で増加したものが5箱で、差し引き164箱の減少となった。一方、整理済の箱数は、171箱増加した。全体では7箱の増加で、2,811箱となる。この内、2,790箱が整理・報告済みで、未整理は21箱となる。整理・報告済みのものの比率は99.3%である。

上記のように、東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は合成樹脂（油脂）製のコンテナに収納してきた。しかし、油脂製のコンテナは、火災の際に甚大な被害を受けることが明らかとなっている。2000年以降、各地で遺物収蔵庫の火災が相次いだ。油脂製の遺物箱は、火災時の熱を受けると、極めて短時間で溶解する。溶解した油脂は、遺物を巻き込んだ塊となる。この塊から遺物を取り出すことは難しく、膨大な時間や労力が必要となってしまう。一方、木製の箱に収納していた遺物は、火災時の被害が軽微であった事例が報告されている。保存科学研究者の実験を踏まえた研究により、木製箱の方が油脂製箱より耐熱性が高く、火災時に燃焼するまでの時間が長いことが明らかとされてきた（小林啓ほか2006）。最近では、これらの研究成果を受け、遺物収蔵用の木製箱も新たに商品化され、販売されるようになってきている。

このような状況を踏まえ、東北大学埋蔵文化財調査室では、整理作業後の収蔵保管にあたっては、油脂製箱から木製箱へ取り替えていくこととした。調査現地からの取り上げや、水洗作業をはじめとする整理作業中は、油脂製コンテナの方が作業が行い易いため、従来どおりの製品を使用する。整理作業が終了し、収蔵庫で保管する段階で、木製箱を使用することとした。2009年度は、整理作業関係の予算に若干の余裕が生じたため、その範囲で購入が可能な数量を購入することとした。商品化されているものの仕様を検討し、新成田総合社で販売している木製箱300箱と、木製蓋100個を購入した。

仕様の検討では、従来の#32サイズのコンテナと、同じ大きさとなることを基準にした。今回購入した木製箱は、内寸を従来のコンテナに合わせている。底面を頑丈に作る必要から、底板を支える部分の厚みが大きくなっている関係で、全体の高さが大きくなっている（図11）。そのため、棚に収納する際には、従来の棚板間隔では、うまく入らない場合があり、この点で問題が残っている。そのため今回購入した木製箱は、平積みとなっている瓦を収蔵するのに、主に使用することとした。今後も機会を見て、木製箱への転換を進めていく予定である。

油脂製コンテナへの遺物の収蔵に際しては、箱番号と内容物を記載した紙製シールを貼り付け、さらにその上に透明テープを貼り付けて保護していた。木製箱については、シールの貼り付けが難しいため、箱番号と内容物を記載したシールは、ラミネートフィルムに挟み込んで封入し、その上で、タッカーデ打つ付けることとした。これらのラミネート加工したシールは、火災などの際に焼失し、箱の内容物が判らなくなってしまう恐れもある。また、タッカーデ留めたシールが、はがれる可能性も残っている。そのため、真鍮製のプレートを作成し、箱番号を刻印した上で、真鍮釘で箱に打ち付けることとした。英字と数字を組み合わせる刻印セットを購入し、真鍮プレートについては、必要な大きさ・形状に切断・孔開け加工をしたものを特注した（図12）。

遺物収蔵コンテナは、多くは収蔵庫の棚に収納している。このような棚では、地震の際に、棚の倒壊よりも、棚板から箱が落ちる被害の方がはるかに多い。棚の前面に、転落防止のベルトなどを設置すると、このような被害は防げる。2009年度は整理作業関係の予算に若干の余裕があったため、棚に設置する転落防止専用のベルトを購入した（オーエッチ工業株式会社製、商品名：タナガード）。棚支柱に取り付けられ、バックルで閉鎖作業ができるものである（図13）。



図13 資料収蔵棚での転落防止ベルトの設置状況

## 5. 研究活動

### (1) 受託研究・共同研究等

2009年度は、下記の受託研究1件を実施した。

受託者：岩手県山田町長 沼崎喜一（担当：教育委員会生涯学習課文化担当）

研究課題：房の沢古墳群出土品保存処理についての研究

研究目的：山田町房の沢古墳群から出土した鉄製品（刀1点・馬具15点・その他の製品20点）を恒久的に保存するため、有効な保存処理方法（脱塩処理および樹脂含浸による強化と修復）の研究を行う。

研究経費：2,197,000円

岩手県山田町の房の沢古墳群は、8世紀を中心に築造された末期古墳で、豊富な鉄製品が出土している。1996～1997年度に発掘調査され、出土鉄製品は、1997年度に保存処理が施されていた。しかし、脱塩処理が不充分であったため、その後の経過観察によって進行性の腐食生成物が確認され、再処理が必要な状態となっていた。これらの鉄製品には、木質・繊維・漆など有機質が多数付着して遺存しており、通常の方法では再処理が困難であった。そのため、東北芸術工科大学の松井敏也講師（2004年から筑波大学大学院講師）・手代木美穂氏と協力しつつ、同古墳群出土鉄製品内の5点の鉄刀について、再処理方法を検討し再処理を実践することを、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（当時）が受託研究として担当することとなった。この受託研究は2003年度と2004年度の2ヶ年にわたりて実施し、松井氏らによって開発された純水を利用した脱塩方法（松井敏也ほか2005）を採用することで、再処理を行うことができた。

房の沢古墳群からは、様々な種類の鉄製品が多数出土している。2ヶ年で再処理を実施したのは鉄刀5点のみであり、全体から見ればごく一部である。そのため山田町教育委員会では、国庫補助金を得て、残る房の沢古墳群出土鉄製品の再処理を、2005年度から2009年度にかけての5ヶ年で実施する計画を立てた。この再処理の実施を、当調査室が山田町からの受託研究として行うこととなった。本年度は新たな5ヶ年計画の5年目として、刀1点と馬具15点・その他の製品20点を対象資料とした。

#### 【馬具・その他の製品保存処理工程】

馬具15点とその他の製品20点については、例年どおり、以下の手順で再処理を行った。

##### ①事前調査

・処理に先立って、資料の状態を調査し、必要な記録を作成する。

##### ②クリーニング

・前回処理の際に除去が不十分なまま残された鏽、および新たに生成した鏽を、除去する。

##### ③脱脂処理

・前回処理で含浸されている樹脂を除去するため、有機溶剤（アセトン）で洗浄する。

##### ④脱塩処理

・純水を用いて、資料中に残存している塩類を除去する。

・脱塩処理は、純水に資料を一定期間浸漬し静置したあと水を替える方法と、純水を滴下し同時に排水する流水法の2段階で行い、定期的に導電率を計測し評価しつつ進める。

##### ⑤脱水処理

・樹脂含浸に先立って、資料の水分を除去するよう、充分な乾燥を行う。

##### ⑥樹脂含浸

・資料全体を強化するため、アクリル系樹脂を減圧含浸する。

##### ⑦接合・修復・補色

・本体から分離した破片などを接合する。

- ・錆で大きく損なわれた部分など、強化が必要な部分は、エポキシ系樹脂を充填して修復する。
- ・エポキシ系樹脂を充填した部分は、違和感がないような形で補色する。

#### ⑧報告書作成

- ・①～⑦の作業過程、及び結果をとりまとめた報告書を作成した。

#### 【RT08古墳出土方頭横刀保存処理工程】

RT08古墳出土の方頭横刀については、鞘の表面に塗られた漆膜がきわめて良好に残存しており、通常の処理方法を採用すると、漆膜が剥落する危険性が高い。そのため、2007年度に、処理の際に漆膜を保護する養生材を選定するためのモニタリングテストを実施した。その結果、脱脂工程での養生材として膠、脱塩工程の養生材としてバラロイドB72を利用することとした。全体の再処理工程は上記の通常のものと同じであるが、途中にこれら養生材での養生を施す工程と、最後に養生材を取り外す工程が加わる。全体の処理工程は、2008年度と2009年度の2ヶ年で行うこととし、2008年度は脱脂処理までを実施した。2009年度は、残る工程を実施することとした。

#### 2008年度実施工程

- ①現状調査
- ②養生（第一段階）
- ③クリーニング
- ④脱脂処理
- ⑤報告書作成

#### 2009年度実施工程

- ①養生（第二段階）
  - ・脱塩処理の際に、膠による養生剤が溶脱しないよう、第二段階の養生をする。
  - ・膠による養生箇所に、バラロイドB72（アセトン10%溶液）を塗布して、膠による養生箇所をカバーする。
- ②脱塩処理
  - ・純水を用いて、資料中に残存している塩類を除去する。
  - ・脱塩処理は、純水に資料を一定期間浸漬し静置したあと水を替える方法と、純水を滴下し同時に排水する流水法の2段階で行い、定期的に導電率を計測し評価しつつ進める。
- ③脱水処理
  - ・樹脂含浸に先立って、資料の水分を除去するよう、充分な乾燥を行う。
- ④樹脂含浸
  - ・資料全体を強化するため、アクリル系樹脂を減圧含浸する。
- ⑤膠除去
  - ・第一段階の養生剤である膠は、この段階でも残存しているため、除去する。
  - ・実体顕微鏡下において、カッター・ピンセットなどを用いて除去する。
- ⑥接合・修復・補色
  - ・本体から分離した破片などを接合する。
  - ・錆で大きく損なわれた部分など、強化が必要な部分は、エポキシ系樹脂を充填して修復する。
  - ・エポキシ系樹脂を充填した部分は、違和感がないような形で補色する。
- ⑦報告書作成
  - ・①～⑥の作業過程、及び結果をとりまとめた報告書を作成した。

## (2) 学会発表等

2009年度は、調査室の業務にかかわる、学会での研究発表等としては、次の発表を行った。

- ・平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会 2009年12月12日 於：東北歴史博物館

「芦ノ口遺跡第7・8次調査の概要」発表要旨にて資料発表

## (3) 科学研究費採択状況

2009年度において、当調査室の文化財調査員で、科学研究費等の交付を受けたものはなかった。

# 6. 教育普及活動

## (1) 非常勤講師

2009年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

- ・藤沢 敦 東北大学大学院文学研究科・文学部 考古学特論・各論（後期）「古墳時代研究の方法」
- ・藤沢 敦 宮城教育大学 日本史講義D・考古学講義（後期）
- ・菅野 智則 茨城大学人文学部 文化財情報学（後期）

## (2) 授業など教育活動への協力

学内外での授業などの教育活動への協力としては、以下のものを行った。

- ・東北大学大学院文学研究科・文学部 考古学実習 保存処理実習

2010年1月20日 於：埋蔵文化財調査室保存処理作業棟

授業担当教官：阿子島香（文学研究科教授）・柳田俊雄（総合学術博物館教授）

鹿又喜隆（文学研究科准教授）

調査室担当者：藤沢敦・柴田恵子・千葉直美

## (3) 保管資料の貸出

2009年度は、調査室保管資料の貸し出し依頼などはなかった。

## (4) 外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2009年5月24・25日 第1回阿光坊古墳群整備検討委員会 於：青森県おいらせ町東公民館

2009年6月27・28日 国立歴史民俗博物館基幹研究「新しい古代国家像のための基礎的研究」共同研究員  
於：国立歴史民俗博物館

2009年8月30日 秋田県埋蔵文化財センター企画展講演会『古代城柵と蝦夷－払田柵跡とその時代』  
講師「倭と蝦夷と律令国家」 於：大仙市ふれあい文化センター

2009年9月5～7日 国立歴史民俗博物館基幹研究「新しい古代国家像のための基礎的研究」共同研究員  
於：東北歴史博物館・東北大学

2009年10月2日 第2回阿光坊古墳群整備検討委員会 於：青森県おいらせ町東公民館

2009年10月20日 第23回仙台城跡調査指導委員会 於：仙台市役所上杉分庁舎

2010年1月22日 第3回阿光坊古墳群整備検討委員会 於：青森県おいらせ町東公民館

- 2010年3月12日 第24回仙台城跡調査指導委員会 於：仙台市役所上杉分庁舎
- 2010年3月20・21日 国立歴史民俗博物館基幹研究「新しい古代国家像のための基礎的研究」共同研究員  
於：国立歴史民俗博物館
- 担当者：菅野智則
- 2009年5月23日 東北芸術工科大学東北文化研究センター  
平成21年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業  
「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態の総合研究」  
研究会「東北縄文前期の集落と墓制」での研究発表  
発表題目「東北地方における縄文時代前半期集落の変遷」
- 2009年7月28日～8月6日 アメリカ合衆国ワシントン州オリンピア市 マッドベイ遺跡 発掘調査協力  
名古屋大学大学院文学研究科山本直人教授への研究協力
- 2009年9月17日 日本考古学協会2009年度山形大会シンポジウムでの研究発表  
発表題目「居住形態からみた東北地方の縄文前期」

#### (5) 広報活動

2009年度は、特に広報活動は行わなかった。

#### 〈引用・参考文献〉

- 小林啓・栗本康司・藤沢敦・松井敏也 2006 「木製収蔵箱による埋蔵文化財の収蔵・保管の意義」『日本考古学会第72回総会研究発表要旨』pp.318～321
- 仙台市教育委員会 1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』
- 仙台市教育委員会 1995 『仙台市太白区文化財分布地図』
- 仙台市史編さん委員会編 2006 『仙台市史 特別編7 城館』仙台市
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1985～1994 『東北大大学埋蔵文化財調査年報』1～7
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 1997～2006 『東北大大学埋蔵文化財調査年報』8～18、19-1、20
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2007～2010 『東北大大学埋蔵文化財調査年報』19-2・3・4・5、21～24
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2009 「芦ノ口遺跡第7・8次調査の概要」「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』pp.63～66 宮城県考古学会
- 藤沢敦・千葉直美・柴田恵子・松井敏也・手代木美徳・川向聖子 2005 「岩手県山田町房の沢古墳群の保存処理済み鉄製遺物の再処理」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』pp.308～309 日本文化財科学会
- 松井敏也・手代木美徳・松田泰典・川向聖子 2005 「繊維や漆が付着した保存処理済み鉄製遺物の再脱塩処理方法の検討」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』pp.294～295 日本文化財科学会
- 宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

## IV. 資料

### 1. 国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成6年5月17日 規第56号

#### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

#### (目的)

第2条 調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるため、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

#### (職及び職員)

第3条 調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

#### (室長)

第4条 室長は、調査室の業務を掌理する。

2 室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

3 室長の選考は、第6条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

#### (文化財調査員)

第5条 文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

2 文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

#### (運営委員会)

第6条 調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要な事項を審議するため、運営委員会を置く。

#### (運営委員会の組織)

第7条 運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一 東北大学施設整備・運営委員会各地区キャンパス整備委員会の委員 各1人

二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人

三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四 施設部長

#### (委員長)

第8条 委員長は、室長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会の会務を總理する。

3 委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(調査部会)

第9条 運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

(調査部会の組織)

第10条 調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 調査室の特任准教授
- 二 文化財調査員
- 三 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 四 施設部計画課長
- 五 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(部会長)

第11条 部会長は、室長をもって充てる。

2 部会長は、調査部会の会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

(任期)

第13条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(幹事)

第14条 運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

(事務)

第15条 調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(雑則)

第16条 この規程に定めるもののはか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附 則

1 この規程は、平成6年5月17日から施行する。

2 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

3 東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のように】略

附 則（平成16年4月1日規第207号改正）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成18年4月26日規第80号改正）

1 この規程は、平成18年4月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年4月1日から適用する。

2 平成18年4月1日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第4条第3項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成18年5月16日までとする。

附 則（平成19年4月1日規第76号改正）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

## 2. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2009年度）

委員長 室 長（文学研究科 教授）	阿子島 香
委 員 施設整備・運用委員会川内キャンパス整備委員会委員（文学研究科 教授）	桜井 宗信
施設整備・運用委員会青葉山キャンパス整備委員会委員（情報科学研究科 教授）	岡本 英太郎
施設整備・運用委員会星陵キャンパス整備委員会委員（医学系研究科 教授）	五十嵐 和彦
施設整備・運用委員会片平キャンパス整備委員会委員 (学術資源研究公開センター 教授)	鈴木 三男
施設整備・運用委員会兩宮キャンパス整備委員会委員（農学研究科 教授）	國分 牧衛
文学研究科 教 授	今泉 隆雄
文学研究科 教 授	大藤 修
理学研究科 教 授	藤巻 宏和
工学研究科 教 授	飯淵 康一
学術資源研究公開センター 教 授	柳田 俊雄
東北アジア研究センター 教 授	平川 新治
施 設 部 長	山下 治裕
幹 事 施 設 部 計画課長	川田 裕

## 3. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2009年度）

委員長 室 長（文学研究科 教授）	阿子島 香
委 員 文学研究科 教 授	今泉 隆雄
文学研究科 教 授	大藤 修
理学研究科 教 授	藤巻 宏和
工学研究科 教 授	飯淵 康一
学術資源研究公開センター 教 授	柳田 俊雄
東北アジア研究センター 教 授	平川 新治
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（特任准教授）	藤沢 敦
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	柴田 恵子
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	菅野 智則
施 設 部 計画課長	川田 裕

#### 4. 東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報1	1985	昭和58年度(1983年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第1地点(NM1)	
		仙台城跡二の丸第2地点(NM2)	
東北大学埋蔵文化財調査年報2	1986	仙台城跡二の丸第3地点(NM3)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和59年度(1984年度)事業概要	
		青葉山B遺跡第1次調査(AOB1)	
東北大学埋蔵文化財調査年報3	1990	青葉山B遺跡第2次調査(AOB2・旧称AOF)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山E遺跡第1次調査(AOE1)	
		昭和60年度(1985年度)事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報4・5	1992	仙台城跡二の丸第6地点(NM6)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		芦ノ口遺跡第1次調査(TM1)	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査(TK)	
東北大学埋蔵文化財調査年報6	1993	研究編-東北地方における近世宿業と陶器をめぐる問題ほか	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和61年度(1986年度)事業概要	
		昭和62年度(1987年度)事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報7	1994	仙台城跡二の丸第4地点(NM4)	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第7地点(NM7)	
		仙台城跡二の丸第8地点(NM8)	
東北大学埋蔵文化財調査年報8	1997	昭和63年度(1988年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点(NM5)	
		平成1年度(1989年度)事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報9	1998	仙台城跡二の丸第5地点(NM5)付帯施設部分	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点(NM5)調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第5地点(BK5)	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	川俣農場町西遺跡第1地点(KW1)	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		平成2年度(1990年度)事業概要	
		仙台城跡二の丸第9地点(NM9)	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成3年度(1991年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点(NM10)	
		芦ノ口遺跡第2次・3次調査(TM2・TM3)	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	考察編-仙台城二の丸跡の考古学的調査-	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		平成4年度(1992年度)事業概要	
		仙台城跡二の丸第13地点(NM13)	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	青葉山地区分布調査	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		研究編-相馬藩における近世宿業生産の展開	
		平成5年度(1993年度)事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	仙台城跡二の丸第12地点(NM12)	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第14地点(NM14)	
		青葉山E遺跡第2次調査(AOE2)	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成6年度(1994年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点(NM15)	
		青葉山E遺跡第3次調査(AOE3)	
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成7年度(1995年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点(NM11)	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点(BK4)	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2001	青葉山E遺跡第4次調査(AOE4)	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		研究編-東北大学構内(仙台城二の丸跡)遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
		平成8年度(1996年度)事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2001	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第6地点(BK6)	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		青葉山E遺跡第5次調査(AOE5)	
		芦ノ口遺跡第4次調査(TM4)	
東北大学埋蔵文化財調査年報19	2001	平成9年度(1997年度)事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点(NM16)	
		青葉山E遺跡第6次調査(AOE6)	

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要 研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要 仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第1分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要 芦ノ口遺跡第5次調査（TM5） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 遺構	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 木簡・墨書きある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点（BK8） 青葉山E遺跡第7次調査（AOE7） 青葉山E遺跡第8次調査（AOE8）	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9） 芦ノ口遺跡第6次調査（TM6）	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10） 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大学埋蔵文化財調査室

#### 〈東北大学埋蔵文化財調査室調査報告〉

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補 償関係調査報告書－	2011	東西線機能関係埋蔵文化財調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12） 川内地区の絵図記載人名の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大学 埋蔵文化財調査室

#### 〈東北大学埋蔵文化財調査室年次報告〉

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

---

## 東北大埋蔵文化財調査室年次報告2009

平成24年3月30日

発行 東北大埋蔵文化財調査室  
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1  
TEL 022(217)4995

印刷 株式会社 東北プリント  
TEL 022(263)1166

---

# **Annual report in fiscal year 2009**

**Archaeological Research office on the Campus,  
Tohoku University**